

総合政策学部は、21 世紀の世界の問題を発見し、問題を解決して社会を先導する「問題解決のプロフェッショナル」の育成を目指している。

ただし、問題の発見と解決はいずれも容易ではない。そのため、入学した学生には、学ぶことが求められる。学ぶにはどうするか。これにはさまざまな考え方があるだろう。答えは一つではないし、そもそも、問題の発見・解決が大学における学びのすべてでもない。では何のために学ぶのか。学びとは何か。

大学への入学を希望する者は、大学における学びについて、無意識ではあってもそれぞれのイメージを持っているだろう。大学、さらには教育全体について、そのあり方に関する議論はあまた存在する。「大学教育とは何か」は決して新しいテーマではない。古くから議論されてきた。

関連して、同じように古くから議論されてきたテーマが読書である。学ぶためには読書が必要だが、電子書籍などの登場によって、書籍の定義も揺らいでいる。文字からのみではなく、映像や音声で学ぶこともある。それでも、読書をすすめる人は多い。何故だろうか。

学びにしても読書にしても、何々を「すべきだ」という古風な主張に直面することは、これまでも多かっただろう。「いまはそんな時代ではない」と反発したこともあったかもしれない。そして、あなたはいま、大学に入ろうと入学試験を受けている。であればこの機会に、大学での学びと読書について考えてみてもらいたい。大げさに聞こえるかもしれないが、それは、人類にとって学びとは何か、「知」とは何かという問題につながる。

下記の文章①は、19 世紀の英国で活躍した哲学者、思想家である J.S.ミルが大学教育について語ったものだが、彼の時代と今日ではすべてが変わったのだろうか。あるいは、今日でも通用する要素があるだろうか。それに対して文章②は、日本の経済団体である日本経済団体連合会（経団連）が 2022 年 1 月に発表した大学教育への経済界としての要望をまとめた報告書である。ミルの議論とどのような共通点、相違点があるだろうか。

文章③と④は、ミルより少し前 19 世紀はじめから半ばにかけてドイツで活躍した哲学者ショーペンハウアーと、1950 年代生まれのフランスの文学者で精神分析の専門家でもあるバイヤールが、学びの一つの柱となる読書と、その背後にある「知」の問題について、いずれも独自の視点で論じたものである。読書や「知」の重要性を踏まえつつも、それらの無条件な礼賛ではない。

例えば文章③は、読書とは「自分でものを考えずに、代わりに他人に考えてもらうこと」と挑発的に述べ、文章④は読書に関する「偽善的態度」をあぶり出している。これまでに、読んでいない本について「読んだふり」をしたことはなかっただろうか。それは、知的であるように見られたかったからだろうか。人はなぜ、知的であると思われたいのか。あるいはそうでない人もいるのだろうか。いるとしたらなぜだろうか。そこに社会の何を見出すのか。政策を考える際に留意することはないか。

この機会に、それらについてじっくり考えてもらいたい。

すべての文章を精読のうえ、下記の2つの問に答えよ。

【問1】 文章①～④のうち、少なくとも3つに具体的に言及し、大学での学びにおいて重要だと考えるものについて600文字以内で論ぜよ。それぞれの文章の内容に賛成する必要はない。批判的検討は常に重要であり、反論も歓迎される。問1の冒頭の欄に直接言及する文章の番号を必ず記入すること。

【問2】 文章①～④を踏まえ、

(ア)問2の冒頭の欄に、社会における「知」として最も重要だと考える要素や役割を簡潔に示せ。

(イ)そのうえで、今日の世界における政策——日本でも海外でもよい——の具体的な事例を2つ挙げ、(ア)で示した「知」がどのように活かされているか、あるいは活かされていないかを含め、800文字以内で論ぜよ。その際に、文章③ないし④（あるいは両方）に具体的に言及することが望ましい。

文章①

J.S.ミル『大学教育について』

(竹内一誠訳) 岩波文庫 (2011 年) から抜粋

(原典はミルの英セント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演

1867 年 2 月実施、一部改変)

大学が国民教育のなかで果たすべき本来の役割については、十分に理解されていると思われます。少なくとも大学がこうあってはならないということについては、ほとんどの人々の間で意見の一致がみられます。大学は職業教育の場ではありません。大学は、生計を得るためのある特定の手段に人々を適応させるのに必要な知識を教えることを目的とはしていないのです。大学の目的は、熟練した法律家、医師、または技術者を養成することではなく、有能で教養ある人間を育成することにあります。

* * * * *

学生が大学で学ぶべきことは知識の体系化についてです。つまり、個々に独立している部分的な知識間の関係と、それらと全体との関係とを考察し、それまでいろいろなところで得た知識の領域に属する部分的な見解をつなぎ合わせ、いわば知識の全領域の地図を作りあげることです。さらに具体的に申しますと、すべての知識をいかに関連づけるか、ある分野から他の分野にいかに進めうるか、高度な知識は一般的な知識をいかに修正するか、また逆に、高度な知識を理解する上で、一般的な知識はいかに役立ちうるかを考察することです。つまり、現に実在しているものすべてが種々様々な特性からいかに構成されているかを考察することです。個別科学や個々の研究方法によってはそれらの特性のほんのわずかな部分しか明らかになりません。それらの全体が考慮に入れられると、われわれは実在するものを抽象としてではなく、「自然」の一事実として真に知ることができるのです。

一般教養教育とは、学生がすでに個別に学んできたことを包括的に見る見方と関係づける仕方を教えるとされていますが、その最終段階においては、諸科学の「体系化」、すなわち、人間の知性が既知のものから未知のものへと進むその進み方についての哲学的研究が含まれています。われわれは、人間精神が自然探究のために所有している手段についての概念を広範囲に適用することを学ばなければなりません。つまり世界に実在する諸事実をいかにして発見するか、それが真の発見であるか否かを何によって検証するかを学ばなければなりません。これこそ、まごうかたなき、一般教養教育の極致であり、完成なのです。

* * * * *

他の学問あるいは研究すべてを排除して、一つの学問あるいは研究のみに没頭するならば、必ずや人間の精神を偏狭にし、誤らせることは、すでに経験によって知るところです。このような場合、精神の内部に育つものは特殊な研究に付きまとう偏見であり、またそれとともに、幅広いものの見方に対してその根拠を理解、評価できない無能力さゆえに視野の狭い専門家が共通して抱く偏見です。人間性というものは、小さなことに熟達すればするほどますます矮小化し、重要なことに対して不適格になっていくであろうと予測せざるをえません。

しかしながら、今日、事態はそれほど悪化しておらず、そのような暗い未来を想像させる根拠はまったくありません。人間が獲得しうる最高の知性は、単に一つの事柄のみを知るということではなくて、一つの事柄あるいは数種の事柄についての詳細な知識を多種の事柄についての一般的知識と結合させるところまで至ります。

いまだかつて一度も自分の家の外に出たことのないような若者を考えてみましょう。このような若者は、自分が教えられてきた意見や考え方とは異なった別の意見や考え方があるとは夢にも思わないことでしょう。あるいは、そのような人が自分とは異なる意見や考え方を耳にしたならば、そういう意見や考え方は道徳的欠陥、性格の下劣さあるいは教育程度の低さによるものだとか考えることでしょう。もし彼の家族が保守党員ならば、自分が自由党員になる可能性などまったく考えられないし、反対に家族が自由党員なら、保守党員になる可能性などまったく考えられないわけです。

一つの家族がもつ考え方と習慣がその家族以外の人間と一切つき合ったことのない少年に及ぼす影響は、他の国についてまったく無知な人間に自国の考え方と習慣が及ぼす影響とほとんど同じだといってよいでしょう。そのような考え方と習慣は、その少年にとっては本性そのもののなのです。したがって、自分の考え方と習慣と異なるものはすべて、彼にとっては心の中で理解できない異常なものであり、自分のとは異なった方法も正しいことがありうる、あるいは、他の方法も自分自身の方法と同様正しいものに向かいうるという考えは思いもよらないことなのです。

こうしたことは、すべての国々が他の国から学ぶべき多くの事柄に対して彼の眼をふさぐのみならず、そのような態度をとらなければ、各々の国が自らの力で成し遂げることのできる進歩までも阻止することになります。もしわれわれの意見や方法は修正されうるものだという考えから出発しなければ、われわれは決して自らの意見を訂正することも、考え方を修正することもしないでしょう。

外国人は自分たちとは違った考え方をすると思うだけで、なぜ外国人が違った考え方をするのか、あるいは、彼らが本当に考えていることは一体何なのかということを理解する

のでなければ、われわれのうぬぼれは増長し、われわれの国民的虚栄心は自国の特異性の保持に向けられてしまうでしょう。

進歩とは、われわれのもつ意見を事実との一致により近づけることです。われわれが自分自身の意見に色づけされた眼鏡を通してのみ事実を見ている限り、われわれはいつになっても進歩することはないでしょう。しかし、われわれは先入観から脱却することはできないのですから、他の国民の色の違った眼鏡をしばしばかけてみることを以外にこの先入観の影響を取り除く方法はないのです。そしてその際、他の国民の眼鏡の色がわれわれのものとまったく異なっていれば、それが最良であります。

文章②

一般社団法人 日本経済団体連合会 提言「新しい時代に対応した大学教育改革の推進 —主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて—」 (2022 年 1 月 18 日、一部改変)

I. Society 5.0¹において大学に求められる役割

(1) 教育面での役割

大学の教育面での役割は、幅広い知識や技能、専門能力の学修を通じて探究力や社会課題の解決能力を涵養（かんよう）することで、新たな時代を牽引する人材や、社会の中核で活躍する人材を育成・輩出することである。特に、Society 5.0 に向けて今後、DX や GX が急激に進展する中、イノベーションを起こせる人材や新たな価値を創造できる人材、グローバル・リーダーとなりうる人材を多く輩出することは、そのまま国家や企業の競争力につながる。近年、優秀な高校生が、進学先として日本ではなく海外のトップ大学を選ぶ動きが一部にあり、彼らが大学卒業後も海外にとどまることになれば、優秀な人材の国外流出に直結する。

わが国の大学が国際的に強い競争力を持ち、国内のみならず世界の優秀な人材を惹きつける存在になることが重要である。そのためにも、大学には「Society 5.0 for SDGs」の考え方を共有し、知識や技能等の習得に留まらない、新しい時代のニーズに対応した大学教育を実現することで、Society 5.0 を牽引する人材や社会の中核で活躍する人材の育成に大きな役割を果たすことを期待する。

II. 経済界が求める人材像と採用動向

企業は「採用」を通じて、自社の事業遂行に必要な人的資源を得、付加価値を生み出し、成長することができる。そのため各企業は、自社が求める人材像や必要とする能力・スキルを明確化し、外部にわかりやすく発信することが求められる。一方、大学生にとって「就職」は、企業や社会との主要な接合点であり、就職活動は自らのキャリアのあり方を考え、選択する重要な機会である。

¹ Society 5.0 とは、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会という意味で、政府の第 5 期科学技術基本計画（2016 年 1 月）において初めて提唱された考え。

本章では、産学協議会における議論や、経団連アンケートを基に、経済界が採用にあたって求める能力・資質について述べる。ただし、各企業では、価値創造に向けた人材の多様性確保が重要な経営課題となっており、画一的な人材を求めているわけではないことに留意が必要である。

各大学には、これらを参考に、経済・社会の変化に対応した、特色ある教育を推進することを期待したい。

1. Society 5.0 において企業が求める能力・資質

(1)「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」における産学の合意内容

経団連が 2018 年 10 月に、2021 年度以降入社対象の「採用選考に関する指針」を策定しないことを決定したことを契機に、2019 年 1 月、Society 5.0 人材の育成に向けて、産業界が求める人材像や採用のあり方、大学教育への期待等について、大学と経団連の代表との間で率直な意見交換を行うための継続的な対話の場である「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」が設置された。

産学協議会では、Society 5.0 で求められる能力と資質についても議論し、Society 5.0 の人材には、リテラシー（数理的推論・データ分析力、論理的文章表現力、外国語コミュニケーション力等）、論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決能力、未来社会を構想・設計する力、高度専門職に必要な知識・能力が求められることについて合意している。これらの能力は高等教育機関のみで育成できるものではなく、初等中等教育段階から育成する必要がある。

この他、経団連提言²では、求められる資質として、失敗を恐れずに挑戦する姿勢や、自己肯定感、多様な背景を持つ集団において高いパフォーマンスを発揮するうえで必要な忍耐力やリーダーシップ、多様な他者と協働して新たな価値を創造できるチームワーク、変化の激しい時代の中でスキル・専門性をアップデートするために必要な学び続ける力などが重要であると指摘している。また、人生 100 年時代に豊かな人生を築くうえでは、知識や専門性、リテラシーとともに、あくなき探求心やチャレンジ精神、共感を生む対話力といった資質についても、絶えず磨き続けることが肝要である。

(2)経団連アンケート結果

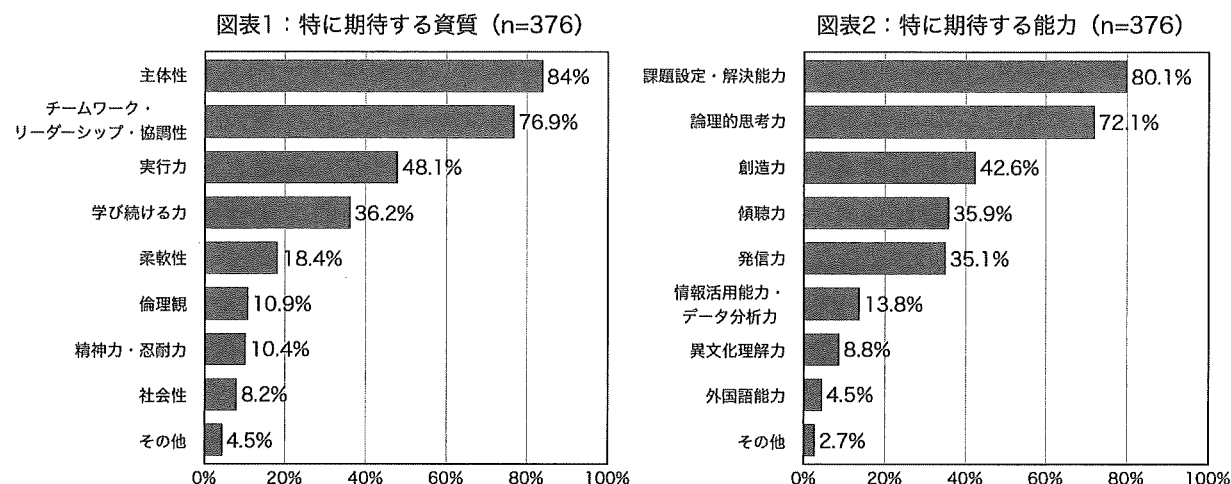
経団連は今般「採用と大学改革への期待に関するアンケート」を実施し、採用の観点から、大卒者に特に期待する資質・能力・知識などを聞くとともに、5 年程度先を見通した採用動向などを調査し、企業における人材戦略の方向性を考察した。

経団連アンケートによると、企業は多種多様な人材を求めつつ、特に期待する資質としては、回答企業の約 8 割が「主体性」「チームワーク・リーダーシップ・協調性」を挙げ、

² 経団連「Society 5.0 において求められる初等中等教育改革 第一次提言－with コロナ時代の教育に求められる取組み－」（2020 年 7 月 14 日）。

次いで「実行力」を挙げる企業が多かった。また、4割近い企業が「学び続ける力」を挙げており、変化の激しい時代のなか、自律的な人材育成・キャリア形成に対する企業の期待が示された（図表1）。

特に期待する能力では、「課題設定・解決能力」「論理的思考力」「創造力」が上位を占め、特に期待する知識では「文系・理系の枠を超えた知識・教養」が最も多く、産学協議会において Society 5.0 で求められる能力・資質として産学間で認識の一致をみたものと整合性のある結果となった（図表2）。



注：3 つまで回答可

【出典：経団連「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」（2022 年 1 月 18 日）】

Ⅲ. 新しい時代への対応に向けて経済界が期待する大学教育改革

1. 基本的な考え方

(1) Society 5.0 に向けた大学教育の方向性

大学は、学問に関する研究を行う場であると同時に、経済・社会を支え、牽引する人材を育成する場でもあり、教育研究の成果を広く社会に提供する場でもある。そのため大学は、経済・社会をめぐる内外の環境変化に対する感応度を高め、教育内容等を不断に見直していく必要がある。特に、わが国企業の国際競争力の強化が強く求められるなか、多くの学生が卒業後、ビジネスの世界に入ることを考えれば、各大学は、育成すべき能力や資質、教育内容・カリキュラム等について、経済界のニーズ等も踏まえて検討し、「3つのポリシー」³に反映させるべきである。

³ ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）。

Society 5.0 からバックキャストすると、経済界でとりわけニーズが高い人材は、デジタルに精通した人材やグローバル人材、環境技術やサステナビリティ課題等に詳しい人材（グリーン人材）と言える。そのような人材の育成に向けて、文理融合教育や、STEAM 教育⁴、リベラルアーツ教育⁵を推進して、幅広い知識に基づく俯瞰力や論理的思考力、数理的推論力、構想力等を涵養するとともに、課題解決型教育やキャリア教育、さらには起業家教育を拡充して、実際に社会で活躍するための素養や能力、課題発見・解決力を身につけさせるよう、大学に期待する声が大きい。

また、変化の激しい人生 100 年時代にあっては、大学を卒業した社会人も、経済・社会の変化に対応して、新たな知識や技能を身につけ、産業構造の変化に対応しながら成長分野に移動していくことが求められる。こうした観点から、今後、大学には、高等学校を卒業した若者の教育のみならず、社会人の学び直しの場合としての役割も期待されており、産学官連携によるリカレント教育プログラムの充実が課題である。こうした「仕事と学びの好循環」を実現していくことで、人々の well-being が達成されるとともに、わが国経済の持続的な成長も実現すると考えられる。

⁴ 今後の社会を生きるうえで不可欠となる科学技術の素養を涵養するとともに、幸福な人間社会を創造するうえで欠かせないデザインや芸術、教養も取り入れて、「知る」と「創る」を循環させる教育。

⁵ 産学協議会では、リベラルアーツ教育について、「人文学、社会科学、自然科学にわたる学問分野を学ぶことを通じて論理的思考力と規範的判断力を磨き、課題発見・解決や社会システム構想・設計などのための基礎力を身に付けること」としている。（出典：採用と大学教育の未来に関する産学協議会「中間とりまとめと共同提言」（2019 年 4 月 22 日））

文章③

ショーペンハウアー『読書について』

(鈴木芳子訳) 光文社古典新訳文庫 (2013 年) から抜粋

(原典は 1851 年刊、一部改変)

読書するとは、自分でものを考えずに、代わりに他人に考えてもらうことだ。他人の心の運びをなぞっているだけだ。それは生徒が習字のときに、先生が鉛筆で書いてくれたお手本を、あとからペンでなぞるようなものだ。したがって読書していると、ものを考える活動は大部分、棚上げされる。自分の頭で考える営みをはなれて、読書にうつると、ほっとするのはそのためだ。だが読書しているとき、私たちの頭は他人の思想が駆けめぐる運動場にすぎない。読書をやめて、他人の思想が私たちの頭から引き揚げていったら、いったい何が残るだろう。だからほとんど一日じゅう、おそろしくたくさん本を読んでいると、何も考えずに暇つぶしができて骨休めにはなるが、自分の頭で考える能力がしだいに失われてゆく。いつも馬に乗っていると、しまいに自分の足で歩けなくなってしまうのと同じだ。

だがこれは非常に多くの学者にあてはまる。かれらは多読のために、愚かになっている。暇さえあれば、すぐ本を手に取り、たえず読書していると、たえず手仕事をするより、もっと精神が麻痺する。手仕事なら作業にいそしみながら、あれこれ物思いにふけることができるからだ。

バネにずっと他の物体の圧力をかけ続けると、しまいに弾力が失われるのと同じように、たえず他人の考えを押しつけられると、精神は弾力性を失う。栄養をとりすぎると、胃が悪くなって、そのうち身体全体がだめになるように、精神も栄養分をとりすぎると、詰め込みすぎで窒息するおそれがある。いいかえれば、たくさん読めば読むほど、読んだ内容が精神にその痕跡をとどめなくなってしまう。精神はたくさんの事を次々と重ね書きされた黒板のようになってしまう。そのため反芻（はんすう）し、じっくり噛みしめることができない。だが食事を口に運んでも、消化してはじめて栄養になるのと同じように、本を読んでも、自分の血となり肉となることができるのは、反芻し、じっくり考えたことだけだ。

ひっきりなしに次々と本を読み、後から考えずにいると、せっかく読んだものもしっかり根を下ろさず、ほとんどが失われてしまう。概して精神の栄養も身体の栄養と変わりはなく、吸収されるのは、摂取した食物のせいぜい五十分の一にすぎない。残りは蒸発・呼吸作用その他によって消えてゆく。

さらに、紙に書き記された思想は、砂地に残された歩行者の足跡以上のものではない。なるほど歩行者がたどった道は見える。だが、歩行者が道すがら何を見たのかを知るには、読者が自分の目を用いなければならない。

人々はあらゆる時代の最良の書を読む代わりに、年がら年じゅう最新刊ばかり読み、いっぽう書き手の考えは堂々巡りし、狭い世界にとどまる。こうして時代はますます深く、みずからつくり出したぬかるみにはまってゆく。

したがって私たちが本を読む場合、もっとも大切なのは、読まずにすまずコツだ。いつの時代も大衆に大受けする本には、だからこそ、手を出さないのがコツである。いま大評判で次々と版を重ねても、一年で寿命が尽きる政治パンフレットや文芸小冊子、小説、詩などには手を出さないことだ。むしろ愚者のために書く連中は、いつの時代も俗受けするものだと言観し、常に読書のために設けた短めの適度な時間を、もっぱらあらゆる時代、あらゆる国々の、常人をはるかにしのぐ偉大な人物の作品、名声鳴り響く作品へ振り向けよう。私たちを真にはぐくみ、啓発するのはそうした作品だけである。

悪書から被る（こうむる）ものはどんなに少なくとも、少なすぎることはなく、良書はどんなに頻繁に読んでも、読みすぎることはない。悪書は知性を毒し、精神をそこなう。

良書を読むための条件は、悪書を読まないことだ。なにしろ人生は短く、時間とエネルギーには限りがあるのだから。

本を買うとき、それを読む時間も一緒に買えたら、素晴らしいことだろう。だがたいてい本を買うと、その内容までわがものとしたような感覚におちいる。

読んだものをすべて覚えておきたがるのは、食べたものをみな身体にとどめておきたがるようなものだ。私たちは食物で身体をやしない、読んだ書物で精神をつちかう。それによって現在の私たちができあがっている。だが、身体が自分と同質のものしか吸収しないように、私たちはみな、自分が興味あるもの、つまり自分の思想体系や目的に合うものしか自分の中にとどめておけない。目的なら、誰でも持っているが、思想体系めいたものを持つ人は、ごくわずかだ。思想体系がないと、何事に対しても公正な関心を寄せることができず、そのため本を読んでも、なにも身につかない。なにひとつ記憶にとどめておけないのだ。

「反復は勉学の母である」。重要な本はどれもみな、続けて二度読むべきだ。二度目になると、内容のつながりがいっそうよくわかるし、結末がわかっているれば、出だしをいっそう正しく理解できるからだ。また二度目になると、どの箇所も一度目とはちがうムード、ちがう気分で読むので、あたかも同じ対象をちがう照明のもとで見ると、印象も変わってくるからだ。

文章④

ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』

(大浦康介訳) ちくま学芸文庫 (2016 年) から抜粋

(原著は 2007 年刊行、一部改変)

＜読まずにコメントする＞という経験について語ることは、たしかに一定の勇気を要することである。本を読まないことを称揚するテキストがほとんど見当たらないのは理由のないことではない。読書をめぐっては、暗然たる強制力をもつ規範がいくつもあって、それが私がここで扱おうとしている問題に正面から取り組むことをむずかしくしているのである。なかでも以下の三つの規範は決定的である。

第一は、読書義務とでも呼ぶべき規範である。われわれはいまだ読書が神聖なものとなされている社会に生きている（こうした社会が減びようとしていることも事実だが）。もちろん本なら何でもいいというわけではないし、どんな本が神聖化されるかは社会階層にもよるが、神聖とされる本に関するかぎり読んでいないことは許されない。読んでいないとなれば人に軽んじられるのは必至である。

第二は、第一の規範に似て非なる規範、すなわち通読義務とでも呼ぶべき規範である。これによれば、本というものは始めから終わりまで全部読まなければならない。飛ばし読みや流し読みは、まったく読まないのとほとんど同じくらいよくないことであり、とりわけそれを口外してはならない。このため、プルーストの作品は全部は読んでいない、ざっと目を通したことがあるだけだ、などと文学を専門とする大学教師がみずから認めるということはまず考えられない。ところが実際は彼らのほとんどがその程度しか読んでいないのだ。

第三は、本について語ることに関する規範である。われわれの文化が暗黙の了解としてあるもののひとつに、ある本について多少なりとも正確に語るためには、その本を読んでいるなければならないという考えがある。ところが、私の経験によれば、読んだことのない本について面白い会話を交わすことはまったく可能である。会話の相手もそれを読んでいなくてもかまわない。むしろそのほうがいいくらいだ。

もっと言うと、ある本についての的確に語ろうとするなら、ときによっては、それを全部は読んでいないほうがよい。いや、その本を開いたことすらなくていい。むしろ読んでいては困ることも多いのである。ある本について語ろうとする者にとっては、とくにその内容を説明しようとする者にとっては、その本を読んでいることがかえって弊害を招くこともあるのだ。この弊害を人は軽視しがちなのである。

*

義務や禁止からなるこの規範の体系は、結果として、人々のうちに読書に関する偽善的態度を生み出した。人が本当に本を読んでいるかどうかを知るのはむずかしい。私的生活の領域で、金銭とセクシュアリティの領域は別として、この読書の領域ほどたしかな情報を得るのが難しい領域はないように思われる。

学者のあいだでは、上記の三つの規範のせいで、嘘をつくのは当たり前になっている。本が重んじられる世界であればこそ、嘘も横行するというわけだ。私はたいした読書家ではないが、それでもある種の本のことはよく知っているので——ここでも念頭にあるのはブルーストだが——、同僚が会話のなかでその種の本を話題にするときには、彼らがそれを本当に読んでいるかどうかは判断できる。そして私の見るところ、彼らが本当に読んでいることはまれである。

こうした嘘は他人に対する嘘である前に、おそらく自分自身にたいする嘘である。自分の業界で必読書とされている本を読んでいないと自分自身にたいして認めることは、それほどむずかしいことなのだ。また、これは読書の領域に限ったことではないが、過去を自分の都合のいいように再構成する人間の能力というのはそれほど高いのである。

本を話題にするとき、ついつい誰もががついてしまうこの嘘は、本を読まないことに重くのしかかるタブーと、その根底にある、おそらく幼年期に由来する一連の不安が形を変えて現れたものである。したがって、こうした状況から首尾よく脱するためには、ある種の本を読んでいないと打ち明けることにともなう無意識の罪悪感を分析することが不可欠である。
